

わくわく中国文化



—三国志から四字熟語を勉強しよう④—

Illustration by KOH_HSL(instagram)

著者の一言



皆さん、四字熟語は難しいと思いませんか。中国語の四字熟語の多くは古書や典故から来ています。その由来を知っておけば、四字熟語も覚えやすくなると思います。今年度は日本でも有名な中国の「三国志」に関する四字熟語を紹介したいと思います。中国語をもっと上達させたい人や三国志に興味を持った人や四字熟語をもっと身につけたい人にふさわしい内容をたっぷり載せますので、ご覧いただければ幸いです。

顾曲周郎(gù qǔ zhōu láng)

汉语成语，指精通音乐戏曲的人。也泛指爱听戏曲音乐的人。此典出自《三国志·吴志·周瑜传》：“瑜少精意于音乐，虽三爵之后，其有阙误，瑜必知之，知之必顾。故时人谣曰：‘曲有误，周郎顾’。”

「顧曲周郎（こきよくしゅうろう）」

四字熟語です。音楽や演劇に深い造詣を持った人を指す言葉です。また音楽や演劇の鑑賞に長けた人を指します。楽譜の些細な誤りにも気づき指摘できる優れた人物を指す言葉です。この四字熟語は『三国志』の「呉志・周瑜伝」から出たものです。「周瑜伝」によると、周瑜は幼い頃から音楽に精通しており、酒席で楽師が演奏を間違えると、必ずそれを聞きつけて演奏者の方に顔を向けたことから、「曲に誤りがあれば周郎（周瑜）が顧みる」と人々が歌ったとされています。



▲『周瑜』 / (Baidu)

如嚼鸡肋(rú jiáo jī lèi)

源自晋代司马彪所著《九州春秋》记载的军事典故。建安二十二年（217年），曹操率军与刘备对峙汉中，面对战局僵持，见食案鸡肋而感叹"鸡肋"。主簿杨修据此推断曹操欲撤军，称："夫鸡肋，弃之可惜，食之无所得，以比汉中，知王欲还也"。次日曹操果然下令退兵。该故事用"鸡肋骨"比喻对事物缺乏兴趣或缺少益处。

「鶏のあばら骨を食べるかの如く（鶏肋を噛むかの如く）」

晋の時代の司馬彪が書いた「九州春秋」に記載された軍事典故です。217年に、曹操軍は漢中で劉備軍と対峙しました。攻め込むべきか引き返すべきか悩んだ曹操は食卓に置かれた鶏肋の料理を目にして「鶏肋か」と嘆きました。曹操の呟きを聞いた部下の楊修はこれを「捨てるには惜しいが、食べるに味はない」と解釈し、曹操の進退に対する悩みを看破しました。翌日曹操はやはり撤兵の命令を出しました。このエピソードから転じて、物事に興味があまりないことや実利は乏しいことに例えます。



▲『鶏肋を噛むかの如く』 / (Baidu)

初出茅庐(chū chū máo lú)

该成语出自于罗贯中《三国演义》第三十九回。
这则成语原指三国时期诸葛亮刚离开他隐居的茅屋跟刘备去打天下，形容初次出来做事，现比喻刚离开家庭或刚到工作岗位上，缺乏经验。

「初出茅廬（しよしゅつぼうろ）」

この四字熟語は「三国演义」から出たものです。劉備が三顧の礼をもって諸葛孔明を軍師として招き、諸葛孔明は隠棲した茅葺きの家を出て劉備のために戦って曹操軍を大破したエピソードです。本来の意味は初めて世に出て仕事をするという意味ですが、現在では、社会に出たばかりで経験に乏しいという意味に転じました。



▲『博望坡の戦い』 / (Baidu)